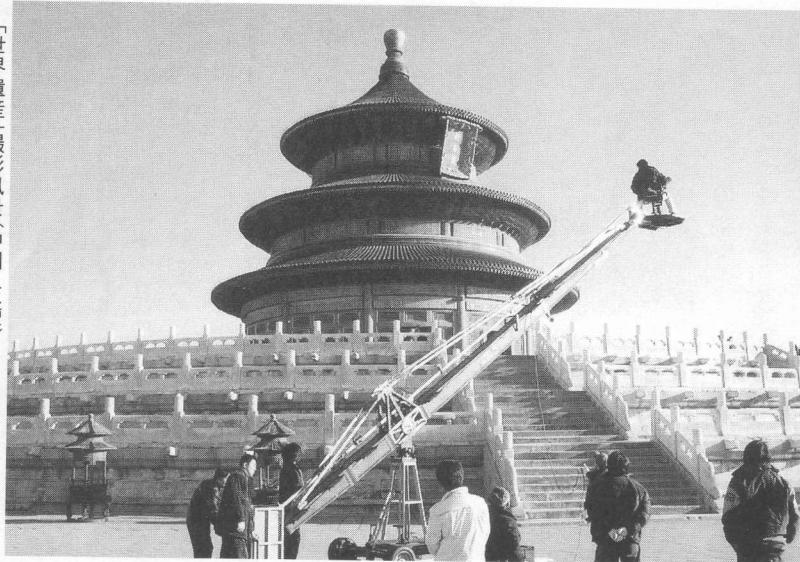


10周年を迎える、新鮮な目を失わずに TBS『世界遺産』

辻村 国弘 (TBS)



【世界遺產】攝影風景（中國・天壇）

廿八年
詩文
之民放史

題字 中川順

新聞の一番後ろのテレビ欄、その片隅で殆んど目に付かないような小さなスタートをした番組が、この4月に10周年を迎えた。かけがえの無い地球の宝をひとつづつ、30分かけてじっくり見せる番組は世界中でこれだけです。世界遺産は現在812を数えますがこのうち10年の間に紹介したのは470カ所余り。長い道のりでした。しかし番組内に「10周年の祝賀」ムードは今のところ見られません。

4月一杯、5回にわたってスペシャル番組を組み、ナレーターに高倉健さんをお迎えしたこと（これだけでもスタッフ全員緊張しましたが…）。

また5月からは、新しいナレーターとして歌舞伎の中村勘太郎さんが決まり、その記者発表などに



筆者近影

忙殺されたこと。

加えて4月から予算がカットされる等、番組をめぐる環境がますます厳しくなったことから、10周年を意識するどころではなかつたからです。

「世界遺産」とは：

世界遺産の考え方は1960年代エジプトのヌビア遺跡がアスワンハイダム建設で水没する危機を救うためユネスコを始め、世界中が協力する決意を確認したことになります。このとき日本も含めた各国は資金だけでなく、遺跡を救うためのアイデアと技術を持ち寄りました。その結果最大のアブシンベル神殿を2000のブロックに分割した上で65メートル高い位置に移して組立て直すという前代未聞の国際プロジェクトが実現したのです。

この“事件”は地球規模で文化財を守ることの意味と可能性を世界中に認識させました。

そして1972年のユネスコ総会で、文化と自然にまたがる「普遍的な価値を持つ地球と人類の宝」を世界遺産とし、これを守る

ための「世界遺産条約」が成立し

たのです。現在、条約の締結国は182カ国にのぼり、ユネスコの活動の中でもつとも成功したもののがひとつとされています。

ユネスコは2001年から生きた人間が受け継ぐ「無形文化遺産」を提唱。日本の「能楽」「文楽」「歌舞伎」を含む90件がすでに登録されています。

手探りの「番組」スタート

日本が世界遺産条約を批准したのは1992年。先進国としては異例に遅い批准でした。

初めての世界遺産登録は翌年、「白神山地」「屋久島」「法隆寺」「姫路城」でした。(2006年現



アンコールの尖塔群を撮る(カンボジア)

在、日本の世界遺産は昨年登録の知床を含め13カ所に増えました)。そして私たちの番組が始まつたのがその4年後。日本ではまだ誰も世界遺産という言葉さえ知らなかったのかも知れません。判らなりのスタートを切るしかありませんでした。

今考えると結果としてそれが良かつたのかも知れません。判らないままで常に「何故?」「どうして?」と問い合わせ続ける「初心」を、必ず聞かされた質問は番組スタッフが持ち続けたことが、いい意味での緊張感と活力を生んだ、と私は見ています。

意気込み：

番組のスタートに当たつて我々に多少の気負いが無かつたわけではありません。当時まだ世界遺産を本格的に取り上げたシリーズは世界中見渡してもありませんでした。世界遺産にふさわしい最高の映像で、後世に残る番組を…。

そう、「映像の世界遺産」とでも呼べるもののが出来ないか?スタッフの熱い議論の中で、レポーターなし、グルメも旅もなし、デジタル映像でひたすら世界遺産そのものを真正面から取り上げる、という現在まで続くスタイルが打ち出されました。

しかし、こんな地味な番組で視聴者はついてきてくれるだろうか?

一つの遺産だけで30分をどう構成すればいいのか?

動かないたつた一つのカーティナルをどう映像にするのか?

スタッフの悩みと疑心暗鬼は1

年近く続きました。

突破口を開いたのは、翌年3月、中国の黄山を扱った番組でした。

水墨画そのものといわれる深山幽谷の舞台。ディレクターは黙つて7分間、雲の動きと山々のたたずまいを、ナレーションなしで見せたのです。

「黄山」でスタッフの迷いは吹き切れたのです。

「世界遺産」そのものと真正面から向き合う…今も続く番組(曜夜11時30分放送)の基本的なスタイルがこのとき出来上がったと私は思っています。

キジー島(ロシア)の木造教会



アーカイブスを意識して…

「映像の世界遺産」という言葉にはもう一つ「魅力的なアーカイブス」を目指す気持ちが込められていました。

テレビは多チャンネル時代に足を踏み入れたばかり、通信との垣根も徐々に無くなりつつある中で、各局とも優良なソフトを喉から手が出るほど欲しい時代に差しかかっていました。『世界遺産』はまさにそれに応えうる最適の番組と目されたのです。

「デジタル・アーカイブス」: 何時でも、好きなときには瞬時に取り出せ、最良の画質で自由に利用できる「映像の資料庫」。

番組『世界遺産』はこのアーカイブスの役割を始めから担つていたのです。

デジタル収録に拘つたのも(1999年からHDに移行)レポートを敢えて置かなかつたのも全てそれを意識してのことでした。

予算が潤沢なTV番組などあまりはしないと思いますが、全世界を回り、HDの30分を年に50本



空撮の村上カメラマン

も作るのは並大抵ではありません。かといって全てを切り詰めればそれで済む…という訳でもありません。番組はやがて、取材は質素に、映像は贅沢に、を宣言葉にしてゆきます。宿代、食事代、移動費用全てを切り詰めました。今回の取材で必ず3ヵ所の遺産を回ることが原則ですが、全てこれコスト削減のなせる業です。

その代わり空撮やクレーンやレールを使った移動ショット、照明など映像のためには可能な限りお金と知恵を絞ります。一昨年には世界で唯一稼働していた最高の防

振装置・シネジヤイロをニュージーランドから取り寄せ、モンサンミッシェルはじめヨーロッパの名だたる文化遺産の空撮にチャレンジしました。映画『ロード・オブ・ザ・リング』で活躍した特別機器

です。後々まで尾を引くお高いものになりましたが映像は極めて満足の行くもので、番組の財産となっています。

システムイナ礼拝堂の場合

撮影にかけるスタッフの意気込みを一例を挙げてご紹介します。

バチカンのシステムイナ礼拝堂の場合

こここの天井画はミケランジェロが生涯かけて描いた傑作ですが、何に引ききる: というのがディレクターのねらいですが、難問山積でした。

まずローマにある有名な映画撮影所「チネチッタ」の巨大な撮影スタジオから照明装置が運ばれました。タンクステンの柔らかな光りを大天井に満遍なく当てるには最適と、チネチッタの照明マン



システムイナ礼拝堂の壁画に迫るクレーンカメラ

普段は上から照らす巨大なライトをシステムイナの床に一つずつ三脚を付けて、上向きに20台設置しました。

撮影に許された時間は観光客が帰った後の午後4時から11時まで。スタッフ総がかりで秒読みの設営が終わって、カメラが回り始めたのは夜になつてからでした。

結果はどんなことになつたか? 天井画の中心「アダムの創造」。

ぽつかりとスポットが当たつた神とアダムの指先のアップから、ゆつくりと回転しながら天井画一杯にズームバックする画面では、途中から徐々に天井画全体が明るくなり始め、遂には完璧な照明の下にその全貌を現すのです。

ライティングの効果が絶妙な映像でした。

このときカメラの微妙なブレを防ぐため三脚は通常の倍の重さのものを使い、カメラの下には30キロの砂袋を下げ、さらにズームの間中カメラマンは息を止めています。

まさに現場の執念が伝わるようなエピソードです。

取材現場

さて、世界遺産の取材チームは4人。ディレクター、カメラマン、ビデオエンジニア(ビデオエンジニアと言うのは映像全てに責任を持つプロです)。それに照明マン、たったこれだけ。テレビの撮影チームとしては、この業界では最小限というべきでしょう。

この人達が500キロもの機材を抱え、40日の間熱帯のジャングルをさ迷い歩くのです。私はよ

く「4人で、全盛期の小錦二人を連れている」と表現します。彼らのバ

ッジにさりげなく

「世界悲惨」と記

されているのを私は見て見ぬ振りをしています。その

かれらのエピソードを、私は昨年、

パンフレットにこう書きました。

Tディレクター

アフリカのサバンナをロケ中、

「ワシャワシャ」という毒虫に刺され、意識不明で現地の病院に担

ぎ込まれ、死にかける。

Kディレクター

リビアロケで、ジープから砂漠

に右足をドンと下ろしたら、5セ

ンチ横に鉄の突起が…地雷だつた。

死にかける。

Eディレクター

エベレストロケで、空撮のヘリ

コプターが高度8000メートルでエアポケットにはまり20000メートルも落下。

死にかける。

アルジエリアロケで、突如として大洪水に襲われ、多数の死者と共に、機材一切を流され：

Hディレクター

中国ロケで、白酒の乾杯攻勢に遭遇、軍人と乱闘になり、池に投げ込まれ肋骨を折り、死にかける。

Iディレクター

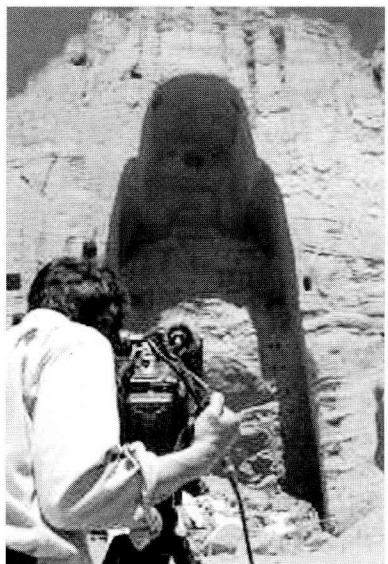
中国ロケで、白酒の乾杯攻勢に遭遇、軍人と乱闘になり、池に投げ込まれ肋骨を折り、死にかける。

死にかける。

誇張でも何でもなく現場の人達は連日こんな目に遭いながら世界遺産をもつともっと素晴らしい番組にしたいと汗を流しています。

これから…

始めに私は10周年を迎えても番組内に祝賀ムードは無かつたと書



破壊されたバーミアン遺跡

きました。予算カットのことにも触れましたが、実はそれ以外にも番組をめぐる環境は年々厳しくなってきています。

はつきりいいますと、どの世界

遺産も撮影の許可がなかなか下りず、下りたとしても、とてもなく撮影料を要求されることが極めて多くなつたのです。バチカンやモスクワのクレムリンなどは許可を得るまでに1～2年の交渉は当たり前ですし、中国では世界遺産のほとんどを管理している「国家文物局」がなかなかOKを出してくれません。また撮影料の高騰は

全世界的な傾向です。

加えて10年間に500カ所近い取材をしてきますとこれからは遠隔地ばかりが残ることになります。南極に近い海上には現在4カ所の島々が世界遺産として登録されていますがこれなどどうやつて行けばいいのか途方にくれるばかりです。

また世界遺産では特にヘリコプターでの撮影が禁止されるなど(鷺や鷹の生態に悪影響を及ぼすというのがその主な理由です)。カメラがなるべく動いて独自の映像を撮るという番組の独自性も

発揮しにくくなります。

幸い今のところ多くの視聴者のいささか八方塞がりという状況の中で、10周年といえどもスタッフは厳しい表情を崩す訳には行かないのです。

方々やユネスコからも番組は高い評価を頂いているものの、10年を迎えて先行き多難を感じざるを得ません。

おしまいに：

現在、812カ所にも増えた世界遺産はこれからも増え続けるのでしょうか?

世界遺産検定などというものが

出来たのは如何なものか?

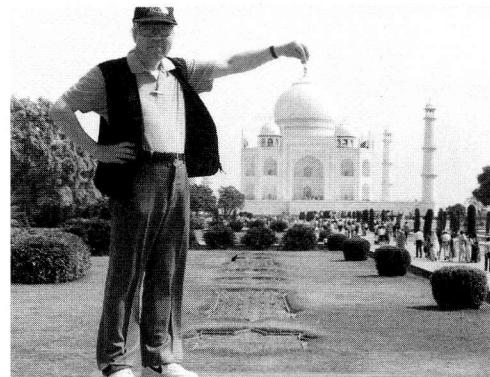
富士山は世界遺産になれるのか? NHKが妙に力を入れ始めた世界遺産の番組はどうなるのか?

「世界遺産」は、今日本でひとつこのキーワードになつています。それが「世界遺産」の生命です。カメラの思惑を超えて今の日本には「世界遺産」という言葉があふれかえつてているように思えます。

このよう中で11年目に入った番組をどう舵取りしていくのか? 今番組スタッフ全員の重いテーマといえましょ。

ヘ99年ギャラクシー特別賞 選評から

写真提供 番組『世界遺産』
<http://www.tbs.co.jp/heritage/>



タージ・マハルをつまむ筆者